

【最優秀賞】(旭川地方法務局長・旭川人権擁護委員連合会長賞)

タイトル：人権について思うこと

生徒氏名：大垣歩莉

皆さんは「人権」について考えたことがありますか。辞書を引くと「人権(Human rights)＝人間が人間らしく生きるために生来持っている権利」とあります。この言葉にはいろいろな意味が含まれていると思いますが、私はその中でも日常の中でふと感じる差別や偏見について考えてみました。

私がまだ幼かった頃、障害をもった兄の付き添いで母と一緒にある療育施設へ通っていました。そこには兄よりもっと重度の障害を抱えた人たちがいて、言語訓練や運動療法を受けていました。

兄を待つ間私は、本を読んだり売店でお菓子を買ったりして過ごしていたのですが、ある時、立って歩くことのできない三十代位の男の人が、私に話し掛けてきました。彼はきれいに磨かれた廊下を上半身や腕の力だけで移動しています。話し方も麻痺があるせいか普通の人たちとは発音が違います。私はそのような人を見るのが初めてだったので、正直言うと少し怖く感じてしまいました。しかし、一年二年と通ううちに、毎週やってきては話し掛けてくれるその人とは自然に話ができるようになりました。

当時を振り返ると、決して差別していたわけではないし、偏見を持っていたわけでもなく、幼かった私は初めて見る重度の障害の方に対し、感覚的に違和感を持ったのかもしれない。でもその人と接し、その人らしさを理解できると、自分の見方や感じ方も変化していくことを改めて知りました。そしていろいろな障害があるということも…。

私には、物心ついた時から、ハンディを抱えた兄がいたし、私たちの周りにはいつも様々な個性をもった子供たちがいました。そんな環境で育ちながらも、私自身、そのことが気になり始めたのは、小学校五年生の頃です。発達障害のある兄は、周りの人たちとは違った行動をとったり、急に笑い出したり…。私は、そのことに対し、「恥ずかしい…。」「いやだな…。」などと思うこともありました。きっと周りの人は「どうしたんだろう?」「なんだこいつ」など、馬鹿にしたように思う人もいる。そう自分の中で決めつけたり…。しかしよく考えてみると、私が兄のことを「恥ずかしい」と感じてしまうのは、兄の障害を理解していないと思われる場で起こるのです。逆に、兄のことをよく理解してくれる場ではそう感じる事がほとんど無いということに気付きました。実際、兄の周りにはたくさんの支援者がいたし、「自分にできることは無いだろうか。」と声を掛けたり、手を

差し伸べてくれる人が…。それを思うと、私が兄に抱いた感情がとても恥ずかしくなりました。知らず知らずに、自分の中で「差別」や「偏見」の気持ちが生まれていたのです。

「人権」の意味にもあるように、「人が人として当然に持っている権利」は、やはりその人らしさを受け入れる、理解することから始まると思います。そして、「可哀想だから手伝ってあげよう。」という発想ではなく、その人が頑張っている、努力している部分を認めた上で「自分にできる助けはないのか？」まずは心の中で考えてみるのが大切ではないでしょうか。

私の卒業した小学校には特別支援学級があり、そこには保育園のころから一緒に育った友達があります。笑顔が可愛くて親しみやすく、その子が困っていたら「何かしてあげなきゃ！」と常に思っていました。そして何かあるたびに「ありがとう」と笑顔で返してくれるので、私の方が嬉しかった位です。私なんかよりもずっときちんとした挨拶ができるその子は、私にとって元気をもらえる存在でした。笑顔で「ありがとう」と言われると、誰もが嬉しくなるし、落ち込んでいる時はその笑顔を見て、勇気づけられます。残念ながら、中学から進路は別々になってしまいましたが、その子と過ごした保育園時代から小学校卒業までの約十年間は、たくさんの元気を分けてもらえたとし、教えられることも多かったように思います。いろいろな出会いがあって今の私があるんだ！そう思わせてくれる仲間の一人がその子です。

私にとっては、兄やその友達、出会った人々の存在があったからこそ、兄を通して自分の中にある偏った考えを見つめ直すことができたし、そんな気持ちと向き合うこともできたのだと思います。そして兄の通う養護学校やいろいろな会、サークルに私も参加することで、様々な障害があることを知りました。直接的な手助けはできなくても理解しようとする心だけは、これからも持ち続けたいと思います。

そして、それは障害者に対してということではなく、全ての人に当てはまることだと思います。人間が人間らしく生きるために誰もが持っている権利＝人権を尊重し、相手を理解し、助け合い、協力し合える社会であってほしいと心から願っています。